

市に出回る怪しげな薬の製造元を突き止めたクリスは
調査のため忍び込むも不覚をとって囚われてしまう。

重厚なソファに手足を縛り付けられ無防備に身体を曝したまま
下卑た笑みを浮かべる男達に取り囲まれていた。



『小僧かと思ったら小娘かよ。
紛らわしい貧相なカラダしやがって』

『わからんぜ。
じっくり確かめてやらないとな』

（こいつら……ッ好き放題言ってッ!!
あとで覚えてなさいッ）

男はクリスのボディラインを確かめるように
いやらしい手付きで掌を彼女の体中に這わしていく



『きッ、気持ち悪いッ
——触らないでッ!!』

どれだけ喚いても男は手の動きを止めはしない。

うあッ

クチュ

『うあッ!! そこおッ、

——ぐりぐりするのをやめてえ!!』

敏感な箇所を遠慮なく指で穿られ
クリスは身体が震えるのを抑え切れなかった。

やッ

ん

「スケベなカラダだな
もうこんなに硬く尖らせやがって」

「どれどれ…
オレにも弄らせてくれよ」

「あッ、——くッ、……やめてッ、
そんなに強く挟らないでッ!!」

クリスの反応に気を良くした男達の愛撫は
ますます熱を帯びていった。



男が傍らから取り出した按摩器を
クリスの股間に宛がう。

唸りを上げて震える先端部が
彼女の性感帯に激しい振動をもたらしした。

んんん！！

「んん——ッ！！ んぐッ！！」

（ぎぎつらいらいッ
腰が砕ける——ッ！！）

「コイツは只の按摩器じゃないぜ。
こうやって魔力を流すとな——」



振動と共に流し込まれた魔力が
クリスの性感を強制的に亢進させる。

あー
のー
ゴ

「……おあッ♡」

抗う僅かの暇すら与えられず
クリスは絶頂に打ち上げられた。

「はッ、はッ、——はあッ」

「この程度で音をあげてるようじゃ
先が思いやられるなあ」

はッ

はッ

望まぬ絶頂に震え息を必死で整えるクリスの肉体を
いやらしい笑みを浮かべながら男が撫でまわしていく。



男は粘ついた液体の入った容器を手に取り
中身をクリスの体表に塗り始めた。

「こいつが欲しがってたヤツだ
遠慮なく味わうがいい」

「んッ♡くぅッ♡ふッ」

（あ、あついいッ!! 肌がビンカンすぎてッ
ヘンな声がッ——抑えられないッ!!）

股間に潜り込んだ男の掌がパンツの下で蠢き
イヤらしい水音を何度も奏でる。

男は粘ついた液体の入った容器を手に取り
中身をクリスの体表に塗り始めた。

「こいつが欲しがってたヤツだ
遠慮なく味わうがいい」

「んっ♡くうっ♡——ふっ」

（あ、あついつ!! 肌がビンカンすぎてッ
ヘンな声がッ——抑えられないッ!!）

股間に潜り込んだ男の掌がパンツの下で蠢き
イヤらしい水音を何度も奏でる。

男は粘ついた液体の入った容器を手に取り
中身をクリスの体表に塗り始めた。

「こいつが欲しがってたヤツだ
遠慮なく味わうがいい」

「んっ♡くうっ♡——ふっ」

（あ、あついつッ!! 肌がビンカンすぎてッ
ヘンな声がッ——抑えられないッ!!）

股間に潜り込んだ男の掌がパンツの下で蠢き
イヤらしい水音を何度も奏でる。

男は粘ついた液体の入った容器を手に取り
中身をクリスの体表に塗り始めた。

「こいつが欲しがってたヤツだ
遠慮なく味わうがいい」

「んっ♡くうっ♡ふっ」

（あ、あついつ!! 肌がビンカンすぎてッ
ヘンな声がッ——抑えられないッ!!）

股間に潜り込んだ男の掌がパンツの下で蠢き
イヤらしい水音を何度も奏でる。

男は粘ついた液体の入った容器を手に取り
中身をクリスの体表に塗り始めた。

「こいつが欲しがってたヤツだ
遠慮なく味わうがいい」

「んっ♡くうっ♡ふっ」

（あ、あついつ!! 肌がビンカンすぎてッ
ヘンな声がッ——抑えられないッ!!）

股間に潜り込んだ男の掌がパンツの下で蠢き
イヤらしい水音を何度も奏でる。

「これからコイツで狂わせてやるからよお…
頼むから舌嚙んで死なないでくれよ」

「なッ!? ヤダヤダッ!!
そんなモノ、近づけないでえ——ッ!!」

あッ

ヤダッ

ビク

ペタ
ペタ

擦りつけられたらいかにもヤバそうな
ゴツゴツした苦瓜が股間に押し当てられる。

恐怖で目を見開いて必死に暴れるも
四肢を縛り付けられたソファアークが
軋んだ音をあげるだけであつた。

[illegible]

尖った表面の瘤は布地の上からでも
敏感な陰核を容赦なく弾き転がしていった。

苦瓜が前後に擦れる度に
凶悪な快感が衝撃と化して
脳天に何度も叩き込まれる。

「イぐツ、いぎツ
——んイイイ♡」

液体の催淫作用で昂ったクリスの肉体は
容易く絶頂の連鎖で暴れ狂っていく。

Sound effects visible in the panel include: グッ, ズリッ, イグツ, いぎツ, んイイイ♡, ズリッ, ズリッ, ズリッ.

[illegible]

尖った表面の瘤は布地の上からでも
敏感な陰核を容赦なく弾き転がしていった。

苦瓜が前後に擦れる度に
凶悪な快感が衝撃と化して
脳天に何度も叩き込まれる。

「イグツ、いぎツ
——んっ♡」

液体の催淫作用で昂ったクリスの肉体は
容易く絶頂の連鎖で暴れ狂っていく。

尖った表面の瘤は布地の上からでも
敏感な陰核を容赦なく弾き転がしていった。

苦瓜が前後に擦れる度に
凶悪な快感が衝撃と化して
脳天に何度も叩き込まれる。

「イぐツ、いぎツ
——んイイイ♡」

液体の催淫作用で昂ったクリスの肉体は
容易く絶頂の連鎖で暴れ狂っていく。

苦瓜の先端がより深くクリスの淫裂を抉った。

パンツの下で陰核がほじくり返され
包皮が一気に剥きあげられる。

『うおッ♡』

敏感極まる性感神経のカタマリを潰されて
クリスは激しく仰け反り悶絶した。



「そんなに景気よくイキまくると後が大変だぞ
——まあ俺らの知ったコトじゃないけどなッ」

笑いながら男はクリスの泣き所を
集中攻撃して彼女をイキ狂わせる。

「お♡、お♡、
——ッお♡♡♡」

連続絶頂地獄に叩き落とされたクリスは
濁った呻き声を上げながらひたすらイキ続けた。



度重なる絶頂によって前後不覚となったクリスは半ば無意識に求められるまま舌を絡ませ男と濃厚な口づけを交わし合っていた。

その一方で別の男はパンツの上から陰部の形を確かめるようにクリスの股間部に指を這わせている。

陰核が弾かれるたび艶めかしい声が重なり合った唇から漏れだしていた。

男はパンツの上から指でクリスの陰核を剥きあげると
形が露わとなった中身をペン状の器具で引っ掻き始めた。

「ぐん——ッ!!」

先細ったペン先が敏感な勃起粒の輪郭を
穿るようになぞるたびに
クリスは雷に打たれたように身体を激しく震わせる。



先程の按摩器と同様の魔力がペン先から陰核に注がれた。

「いぎッ、んひい♡
くひい——ッッ!!」

強制的に勃起させられた性感神経により
凶悪な快感を発する官能器官と化した雌突起が
クリスに絶え間ないアクメの嵐を齎す。



壮絶なアクメ地獄を長時間強いられたクリスは
力なくソファアーにうなだれ男の愛撫の為すがままとになっていた。

パンツ越しでも摘まめるほど肥大した陰核を指で扱かれ
打ち上げられた魚のように時折り身を震わせている。



衣服を剥ぎ取られ全裸を晒すクリス。

露わとなった乳首と陰核は以前と比べ物にならないほど大きく尖り勃っていた。

（なに…これ…）

（これが、あたしの…？）

視界の先で起立して震えるモノが何なのか
混乱した今の彼女には正しく認識できない。

「オマエに塗られた薬が効いた状態でいつちまうとな、
そのたびにデカくビンカンになっちまうんだ」

「立派な雌○ンポになるまでじっくり育ててやるよ
——どこまで耐えられるか愉しみだな」

相変わらずの下卑た笑みを浮かべながら
男達は再びクリスに手を伸ばした。

「びぎッ♡ ぐびい♡ —きひいびいッ♡」

淫薬をたっぷり含んだ筆がクリスの突起部を執拗になぞっていく。

（こ…ッ、こわれるッ
あそ…こッ、だめになるッ）

腰が砕けるほどの強烈すぎる快感が背筋を駆け抜け
クリスは歯を食いしばって何度も絶頂に身を震わせた。



「残念なことに男には効果薄いんだこのクスリ。
オマエは気持ちよさそうで羨ましいぜ」

そう言いながら男達は絶頂地獄に悶絶する
クリスの突起を素手で激しく弾きまわす。

「ボツ♡ ホオ♡ —オオウ♡」

もはや苦痛でしかないアクメの飽和攻撃が
クリスの理性を着実に快感で蝕んでいく。

「久々に育てがいのありそうな雌○ンポだな
頼むから早々にくたばらないでくれよ」

「大抵の女は大豆サイズくらいで
頭をやって壊れちまうからな……」

半ば正気を失い口内を好き勝手に舐られているクリスを尻目に
股間前に陣取った男は彼女の雌突起を念入りに薬塗れにしていく。



膣内に潜り込んだ指が陰核の裏側を激しく圧し擦りながら
男は限界まで飛び出て勃起するクリスの雌突起を弾き回した。

(は、弾けるッ、さきっぱがッ
——はじけて、——しぬッ)

敏感極まり快感に脈動する勃起粒から爆発的に発生するアクメの波が
クリスの体内で滅茶苦茶に乱反射し彼女の四肢を激しく痙攣させる。

とどめとばかりに唸りをあげる按摩器の振動が
クリスの陰核に叩き込まれた。

「オオ♡」

意識は遥か高き絶頂の果てまで一瞬で打ち上げられ
思考は快感の白一色で完全に染め上げられる。

制御を離れた彼女の腰が別の生物のように
何度も跳ね上がり辺りに潮を撒き散らした。

正気を破壊するレベルの強烈なアクメを迎えたクリスは
昏倒寸前に悶えながら弱々しい息を吐いて絶頂の余韻に震えている。

湯気をたて汁を垂れ流すクリスの股間部を
男はいやらしい手付きで撫でまわしていた。



『目に見えてデカくなったもんだな』

男の指が包皮を根元まで捲ると
更に一層肥大した肉真珠が露わとなる。

「んくっ♡」

クリスは皮を捲られた刺激だけで
軽く達してしまっていた。

アッ

男は取り出したブラシでおもむろに雌突起の先端を擦り始めた。

「……ジジッ♡」

筆先が柔らかく湿っているとはいえ
剥き出しの神経を砥がれるような凶悪な刺激に
クリスの肉体が浮く勢いで跳ね上がる。



男達は激しく暴れるクリスの身体を力で抑えつけて
無慈悲な突起磨きを継続していた。

「イグッ♡イグザ♡
——イ……ッ♡」

背筋に膨大な量の快感信号が迸り
クリスの肉体は強制的な硬直と弛緩を繰り返す。

処理許容オーバーの快感が脳髓に叩き込まれ
彼女の思考は「イク」と「ジヌ」でループしていた。

ズ
チャ

「オ♡、オ♡、ウオ♡
……オ——ツツ!!」

天井知らずに重なる絶頂の熱で
クリスの脳髄はオーバーヒートを起こし
彼女の正気はグズグズに灼き爛れていった。

「はしたない先っぽを男にいい様に嬲られる気分はどうだ？」

執拗な突起磨きで更に肥大した陰核を
指でネチネチと扱きながら男はクリスに語りかける。

「アヴ♡、アヴ♡、アグッ♡」

しかし絶頂漬けによる快樂の毒で理性を破壊され
既に言語能力を失ったクリスの口からは
意味ある単語は一向に出てこなかった。



「残念。壊れちゃったか……
あとはイケるところまでイクしかないなッ」

「オオツ♡、オホオ♡
——ジオオオツ♡」

今までは手加減していたと云わんばかりに
男達の責め手は容赦のないものとなった。

イキ殺す勢いの男達の責めにクリスは二層激しく
泣き喚き、終わりなき絶頂に淫れ狂っていく。



——こうして男達が飽きるまで
クリスは苦悶に満ちた絶頂地獄で
ひたすらイキ狂ってのたうち回り続けた

——数時間後、精魂尽き果て大人しくなったクリスの肉体は男達に未だ弄り回されていた。

与えられた愛撫に殆ど声をあげなくなつたが四肢を痙攣せて反応を健気に返している。

「すっかり静かになっちまったがカラダの方はまだ元気だな」

「ホント、甚振りがいのあるヤツだよこのままダメにするのが勿体ない」



「ほら、見えるか？ オマエのそそり立ったのが。
あんなもん股間にぶら下げてちゃ
もう盗賊稼業は無理だな」

「……♡……」

男はクリスの頭を持ち上げて
異常に肥大化した乳首と陰核を見せつけるが
濁った彼女の瞳はもはや何も映してはいなかった。



「まあこれから俺たちの
遊び相手にでもなってもらおうか」

正体を失くし、為すがままとなったクリスの唇に
男がしゃぶりつき口内を舌で蹂躪していく。

「なら徹底的に色狂いにしてやらないとな」

別の男が卑猥に勃起した肉真珠を舌で舐りまわすと
クリスはくぐもった呻き声を漏らしながら四肢を何度も震わせた。



いつの間にか大勢の男がクリスの肉体を口や指で啄んでいた。

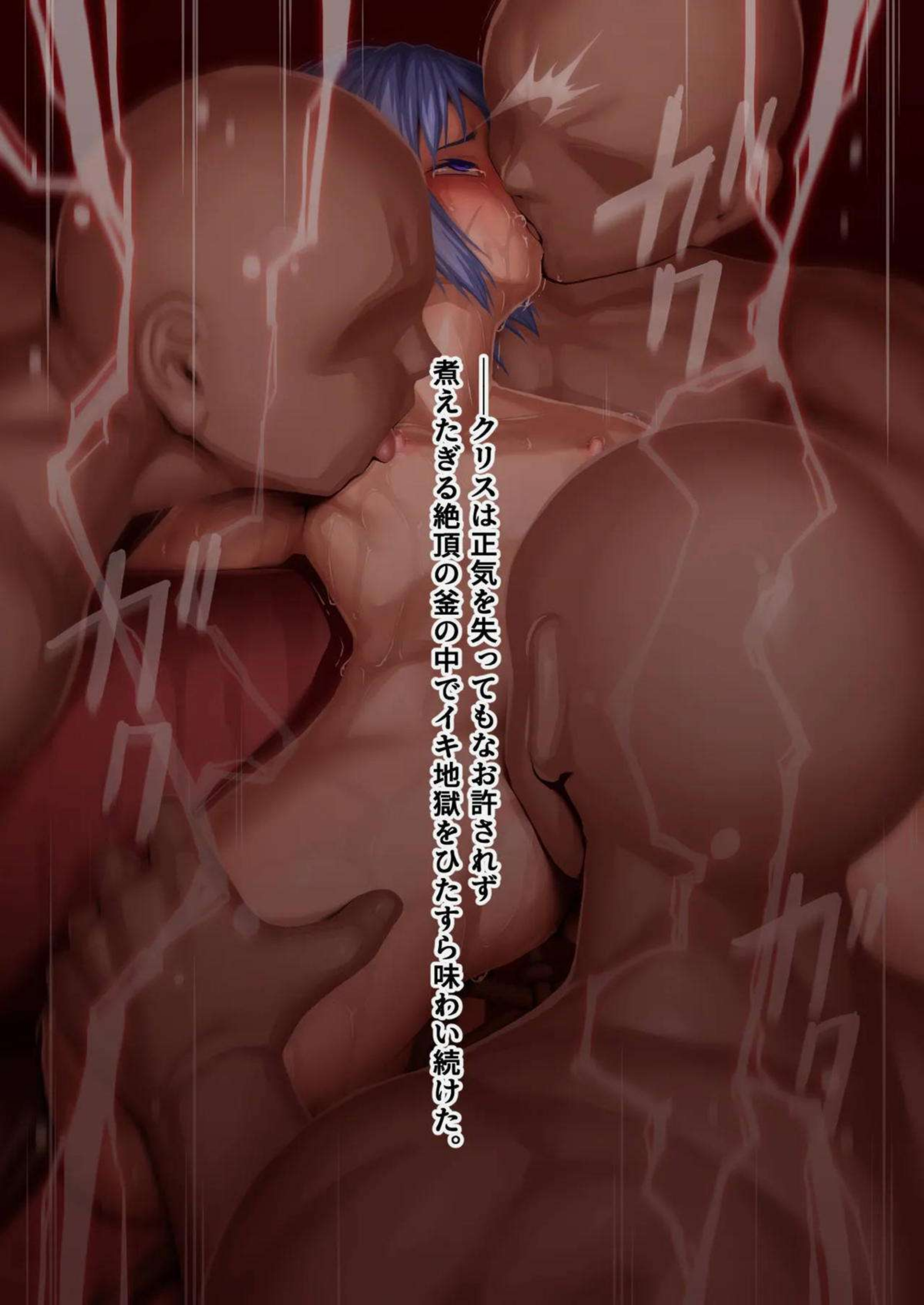
男達の隙間から僅かに覗く彼女の白い四肢が絶えず不規則に痙攣している。

チルルルル

ペチャ

ヌギユ

全身の性感帯を休みなく撚られ、狂い死ぬ程の強烈な快楽が絶え間なくクリスの脳髓に注ぎ込まれていく。



——クリスは正気を失ってもなお許されず
煮えたぎる絶頂の釜の中でイキ地獄をひたすら味わい続けた。











































ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

ハッ
ク

































精魂尽き果てるまでの快樂拷問が終わっても
男達はクリスを解放しなかった。

連続絶頂を強いられて疲弊した彼女を男達が抱え上げ
淫靡に仕上がったその肉体を思うがままに貪っている。

男達の指や舌がクリスの性感帯を余すことなく這いまわり
彼女はくぐもった嬌声や痙攣をひたすら繰り返す。

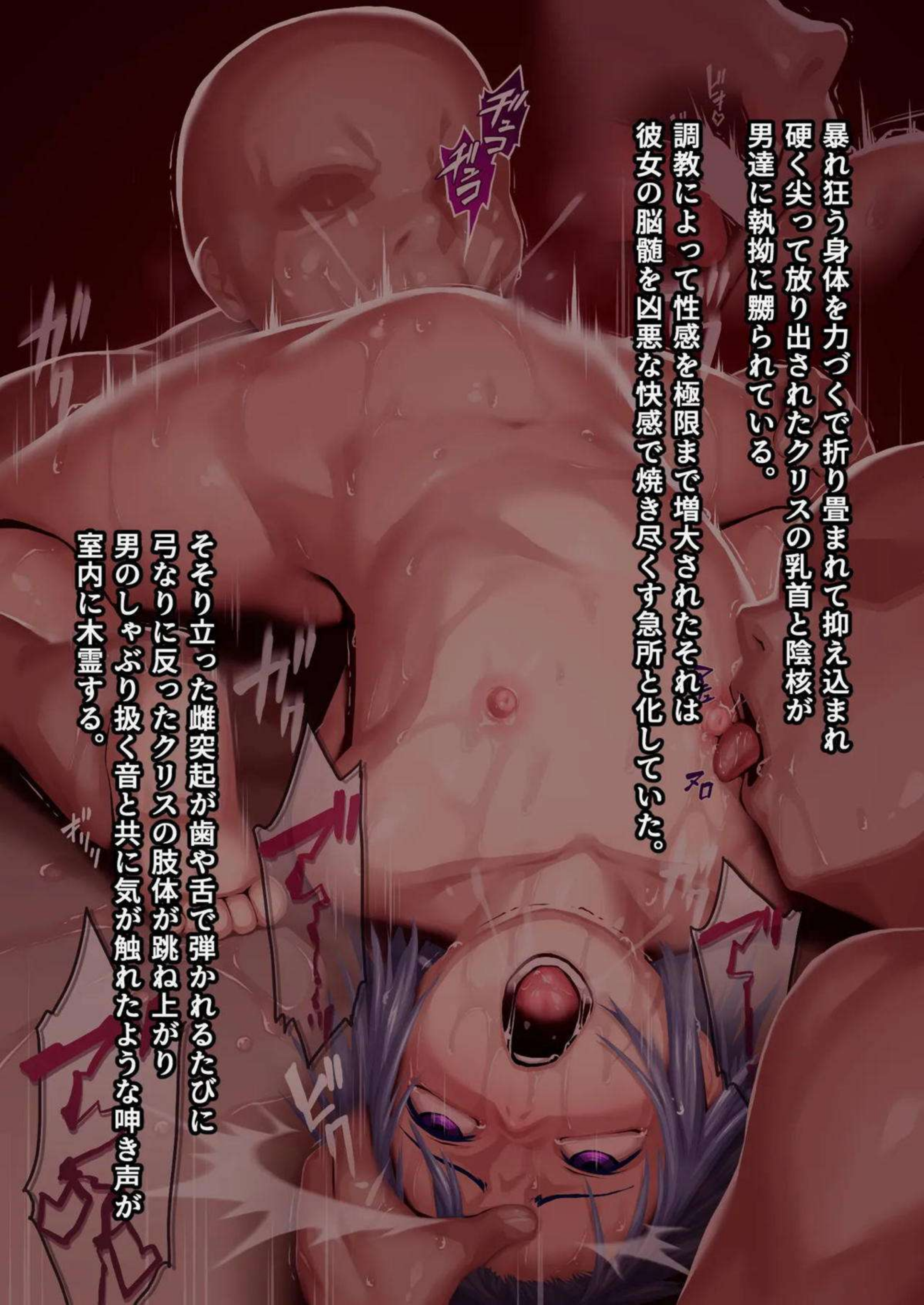
未だ帰ってこられない混濁した意識のまま
クリスは再び絶頂地獄の沼に沈んでいった。



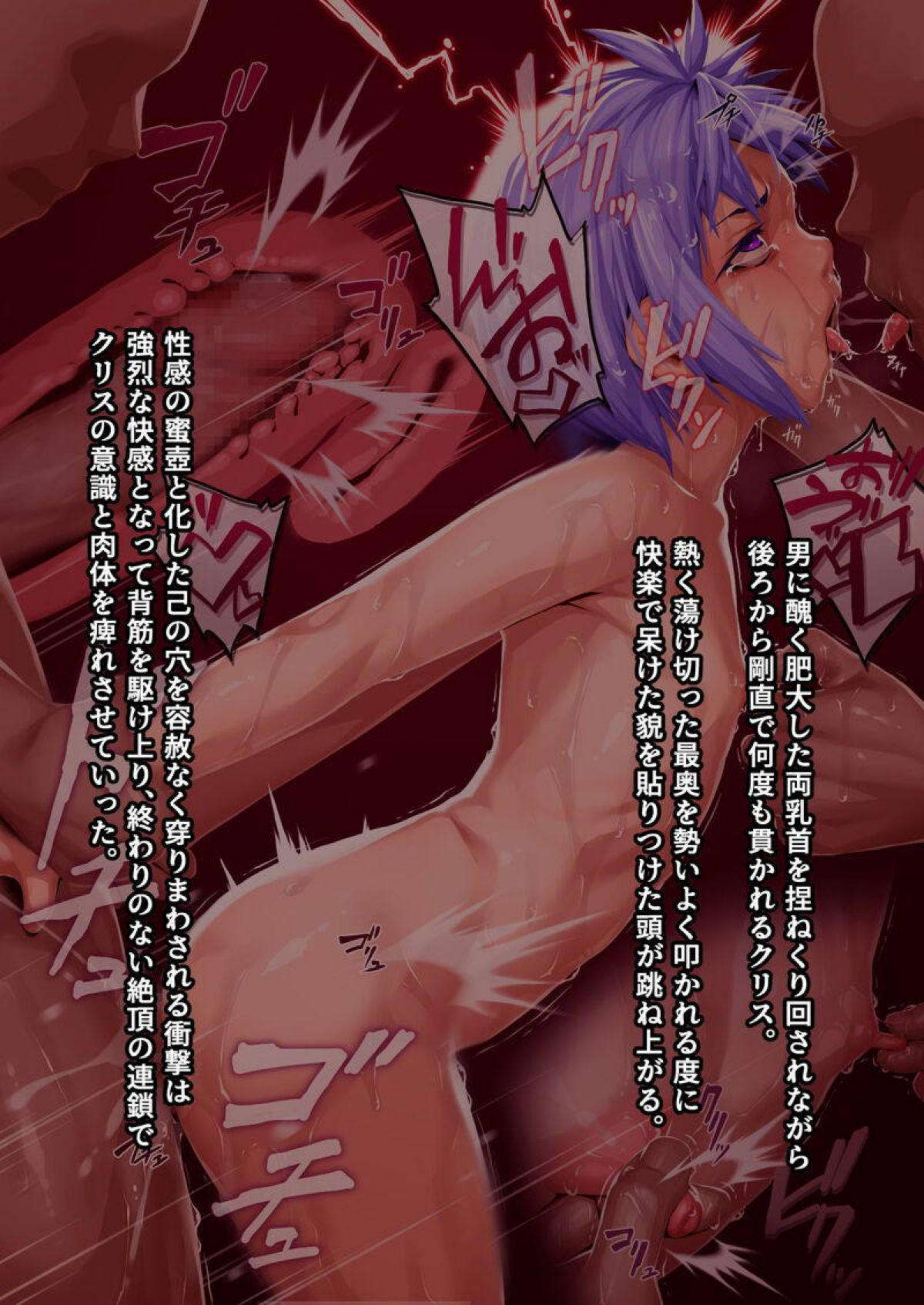
暴れ狂う身体を力づくで折り畳まれて抑え込まれ
硬く尖って放り出されたクリスの乳首と陰核が
男達に執拗に嬲られている。

調教によって性感を極限まで増大されたそれは
彼女の脳髓を凶悪な快感で焼き尽くす急所と化していた。

そそり立った雌突起が歯や舌で弾かれるたびに
弓なりに反ったクリスの肢体が跳ね上がり
男のしゃぶり扱く音と共に気が触れたような呻き声が
室内に木霊する。







男に醜く肥大した両乳首を捏ねくり回されながら
後ろから剛直で何度も貫かれるクリス。

熱く蕩け切った最奥を勢いよく叩かれる度に
快楽で呆けた貌を貼りつけた頭が跳ね上がる。

性感の蜜壺と化した己の穴を容赦なく穿りまわされる衝撃は
強烈な快感となって背筋を駆け上り、終わりのない絶頂の連鎖で
クリスの意識と肉体を痺れさせていった。





群がる男達に前後から挟まれて押し潰され
クリスは股間の両穴をひっきりなしに穿たれていた。

絶え間のないアクメの波が折り重なり
身体がバラバラに弾けとぶ程の快感の嵐が
彼女の体内で暴れまわる。

気力の限界を迎え、項垂れて大人しくなっても
接合部の起立した陰核を乱暴に指で扱かれると
雷に打たれたように背筋が伸びあがり
無理矢理覚醒させられた。

身体の芯を二つの剛直で貫かれたクリスは
為す術もなく男達に埋もれたまま
イキ狂うことしかできない。





果てのないアクメ地獄に気絶と覚醒を繰り返し
力なく崩れ落ちるクリスの肉体を強引に引き起こして
男達は彼女の穴という穴を蹂躞していった。

ひとときわ激しい痙攣と共に再び気を失うも
物云わぬ人形と化した彼女を彼等は構わず嬲りまわす。

取り囲む全員が精の全てを吐き出し満足するまで
クリスは男達の慰みモノとして徹底的に貪られた。